

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

2019
no.506
月号

櫻井さん

櫻井さんは、発達障害のある当事者の立場から、埼玉県の「彩の国福祉教育ボランティア学習推進員」として福祉教育の活動をしているボランティアです。普段は別の仕事をしている櫻井さんですが、「発達障害だけでなく、どんな人でも互いに思いやることができる社会を作りたい」との思いから、当事者会の運営や福祉教育の県域の推進活動とあわせて、ボランティア活動をしています。

福祉教育の活動を始めたきっかけは、ある広報誌が櫻井さんに焦点を当てた連載を掲載したことでした。当時について櫻井さんは「インタビューを通してそれまで意識してこなかった自分の考え方や特性に気づき、周囲の人との付き合いも以前よりうまくいくようになりました。自分の中でも、相手の中でも『なぜなんだろう』と知ろうとすることが、ともに生きる人間関係をつくるのに必要だと感じ、推進員としての活動を始めました」と振り返ります。

櫻井さんの推進員活動のひとつに、小学生から社会人まで幅広い地域住民を対象とした、発達障害の理解を深めるプログラムの実施があります。発達障害のある人が抱えやすい特性の書かれた「凸凹カード」を用いてカードワークを行つプログラムです。櫻井さんは「このワークを行うと発達障害の有無にかかわらず『あ、自分にもあてはまる!』と気づく瞬間が多くあります。発達障害のある人がもつといわれる『凸』は、当事者特有のものというより、誰にでもあるものと気づいてもらつことがねらいです」と話します。

櫻井さんは自身の活動について、「私たちはすべてを理解してほしいとは思っていません。しかし、わかるうと努力してほしいと思っています。最近普及されつつある、配慮が必要であるけれども見た目にはわかりにくい人たちが配慮の必要性を伝える『ヘルプマーク』はそのきっかけになると思っています。人と人とのつなぐボランティアとして、これからも活動を続けていきたいと思います」と思いを話しました。



埼玉県
彩の国福祉教育ボランティア学習推進員
さくらい　えり

櫻井 栄里さん

発達障害があつてもなくとも支え
合える「共生」の社会をめざして

No.506
CONTENTS

特集

地域の支え合いの力を高める、学生・若い世代のボランティア活動

○6 企業のチカラ

広島県・株式会社マツダE&T

企業の社会貢献と社員のボランティア活動を無理なく進め、
本業への循環をもたらす

○7 ボラセンと地域をつなぐSNS

・グローカルな地域をともにつくる

○8 保険のひろば

・INFORMATION

・事務局だより

特集

地域の支え合いの力を高める、 学生・若い世代のボランティア活動

現在、地域では、高齢化・過疎化、貧困や孤立などさまざまな課題が生じています。このようななか、学生や若い世代の力を積極的に活かし、協働の取り組みを行うことで、地域の課題解決をめざしたり、地域の福祉力を高めている地域があります。

今回の特集では、学生のボランティア活動を応援することで地域の支え合いの力を築いている実践事例、またNPOと協働しながら学生が地域の課題解決に向き合っている実践事例を紹介します。

ボランティアセンター・社協が大学生や若い世代とつながるためのヒントを得ていただき、皆さんの地域の支え合いの力を高める活動の参考してください。

事例1

新潟県新発田市社協 新発田市ボランティアセンター ～子どもから学生までの継続した活動づくりが、地域の福祉を進める力～



写真左から川瀬さん、榎本さん、齋藤さん

若い世代を対象とする活動プログラムを継続

新発田市VCでは2009年、それまで福祉教育の一環として進めてきた、中学・高校生が参加する講座(ホームヘルパー3級養成)を見直し、県社協の助成を受けて、中学生から大学生までを対象とした夏のボランティア体験講座「Summer俱楽部ふくし」を開催しました。夏休み期間中、高齢者・障害者福祉から地域の催し物の支援、そして救急法・災害時対応等の講座を複数開催するという基本形は、現在まで10年にわたり続いています。当時企画に携わった川瀬聖志さんは「中学生から大学生までの世代が、自らの地域で何ができるのかを考えもらうきっかけにしたいと考えました」と振り返ります。

新発田市VCでは、「Summer俱楽部ふくし」に大学生が事業のサポート役として参加してもらうことで、同じ世代間

新潟県新発田市は、新潟市の中心部から約30km、鉄道では約40分の距離で、新潟市内への通勤者も多い地域です。一方、市域は市街地から飯豊連峰の山麓、北西部には白砂青松と形容される美しい海岸線が広がり、市街地の一部と山間部では過疎・高齢化が進んでいます。市全体の人口は、2009年の104,000人から現在は97,400人と、10年で約6.3%減少しています。

新発田市社協・新発田市ボランティアセンター(以下、新発田市VC)では、これらの課題を抱える地域での長年にわたる福祉教育の取り組みを土台に、10年前から大学生・高校生を対象とした新たなプログラムに取り組み、地域の課題を若い世代と共にしながら活動を進めています。

のつながりを築き、事業を継続していくたいと考えました。そのため翌2010年、主に大学生などを対象に年間を通じて活動するボランティアサークル「俱楽部ふくし」を設立しました。「俱楽部ふくし」は、この間「Summer俱楽部ふくし」の運営をはじめ、毎年5,000名規模で開催される新発田市ボランティアフェスティバルの企画・運営サポートなどを、世代を交代しながら続けています。

昨年の「Summer俱楽部ふくし」は、県内4大学の後援を受け、期間内8回の講座に中学生から大学生まで延べ71名が参加しました。

地域のありのままの姿にふれるプログラム

「Summer俱楽部ふくし」のプログラムには、市内各地域の現状や課題をボランティア活動により理解する内容を含んでいます。今年は江戸時代から続く

神社の奉納相撲大会の運営補助を行い、地域住民と交流する企画が行われます。これまでには、地域の流木やくるみを使ったものづくり体験などの企画も行われました。

これらのプログラムは、市社協の地区担当職員と地域住民のつながりを活かして企画されます。川瀬さんは、「新発田市社協は事務局長をはじめ、社協の常勤職員11名が分担して市内17地区を担当しています。福祉教育担当と地区担当の職員で話し合い、地域と学生、双方のニーズに合わせて、地域住民と若い世代が協働するプログラムを企画します」と話します。

市社協では2012年に地域福祉活動計画を策定し、その後2016年度までに市内17地区のすべてで地区福祉活動計画を策定しています。計画策定を通じて、地域づくりの目標を社協と地域住民が共有し、そこに若い世代の力を結びつけることが可能になっています。

公営貴財団法人 大和証券福祉財団「令和元年度(第26回)ボランティア活動助成」(応募締切日7月31日必着)

「高齢者、障がい児者、子どもへの支援活動及びその他、社会的意義の高いボランティア活動」もしくは「地震・豪雨等による大規模自然災害の被災者支援活動」について、一定の条件を満たす団体に30万円を上限に助成。
(詳細は「大和証券福祉財団」で検索)

今年度の「Summer俱楽部ふくし」の案内チラシ。



現在も大学院で学びながら、市社協で非常勤の事務員として勤務する齋藤凱斗さんは、「俱楽部ふくし」のOBです。齋藤さんは「高校生や学生が地域のボランティア活動にかかわると、地域が明るくなります。参加する若い世代も地域の課題に気づき、将来、自らが生まれ育った地域をより良くしたいと考えるようになります。このような『原石』を磨くことを応援していきたいです」と語ります。

学生参加で創る情報誌

「俱楽部ふくし」では、若い世代のボランティア活動推進のための無料情報誌「.org」(オルグ)を年に1回作成しています。これまでに8号が作成され、新発田市内の中学・高校生全員をはじめ、市内にある大学・専門学校生に配布しています。情報誌は、「俱楽部ふくし」のメンバーから、より熱心に参加してくれた学生が実行委員として参加して企画します。一方で、新発田市VCで作成を担当する榎本可奈子さんは、「学生も忙しく、毎年一緒に集まって企画を進めることが難しくなっています」と話します。

近年は、実行委員の学生とEメールで連絡を取りながら進めています。榎本さんは、「学生の状況を考えながら、今後はLINE(スマートフォンの無料通信アプリ)の活用なども検討し、学生と双向でアイデアを出し合い、引き続き学生の視点を活かした魅力ある誌面を作っていきたいです」と話します。

は、毎年東京都内の複数の大学の学生が新発田市の中山間地での体験活動に参加するとともに、新潟県内の学生との交流プログラムも設けており、学生同士の新たな仲間づくりの機会につながっています。

若い世代とのつながりが、地域を担う人材を育てる

今後の新発田市VCの活動について川瀬さんは、「過疎高齢化が進む地域では、活動者の高齢化や新たな担い手の発掘の必要性など課題が多いですが、地域福祉活動計画の推進をもとに地縁団体と絆を築いています。この絆を活かして、今後地縁団体と協力して魅力的なボランティアプログラムを用意し、地域内外の若い世代が参加するボランティア活動の架け橋になりたいと考えています。そして若い世代には、活動を通じて新発田への思いを育んでもらいたいと考えています」と話します。

また榎本さんは、「新発田市VCでは、長年にわたり小・中学生向けのプログラムを続けてきました。そこで学んだ子どもたちが高校生となり、新発田市VCの活動に参加しています」と、子どもたちの成長を見ることのできる嬉しさを語ってくれました。さらに「大学生が主体的にプログラムを体験することで、ボランティア活動を通じた地域住民から学びがさらに深くなることを実感します」と振り返ります。

今後、新発田市VCを学生でいっぱいにしたいと、さらなる活動への期待が膨らんでいます。

社協として大学や学生とのつながりを大切にする

新発田市VCは、社協業務と連携して大学や学生との関係を作ることで、「俱楽部ふくし」の活動継続につなげています。市社協は年間8名の学生実習を受け入れるなど、福祉系学生の養成を積極的に行ってています。実習生の受け入れを通じて大学教員との関係を築くことで、当該教員が担当する授業や学生に対して、新発田市VCへの参加を直接働きかけることができます。この関係は、さらに新潟県内の大学に広がっています。榎本さんは、「大学の授業で社協職員が地域福祉の講義をしたり、学生に新発田市VCのチラシを直接配ったり、お互いが分かりあえる関係のなかで活動を紹介できることが強みです」と話します。

また、東京都内の大学教員とのつながりを活かした取り組みも続けています。「Summer俱楽部ふくし」の講座で



公益財団法人 損保ジャパン日本興亜福祉財団「2019年度 NPO基盤強化資金助成」(応募期間9月2日～10月11日)

NPOの基盤強化となる組織・事業活動の強化に必要な資金を助成する「NPO基盤強化資金助成」、地域の中核となり、持続的に活動する質の高いNPO法人づくりを支援し、認定NPO法人の取得に必要な資金を助成する「NPO基盤強化資金助成」の2種類の助成により活動を応援します。(詳細は「損保ジャパン日本興亜福祉財団」で検索)

事例2

滋賀県大津市 NPO法人あめんど、大津市社会福祉協議会 ～NPO法人あめんどによる若者が安心して活動できる取り組みと市社協のサポート～



トワイライトステイ —誰にとっても居心地の良い場

あめんどでは、夜間における子どものための居場所としてトワイライトステイ事業(以下、トワイライト)を実施しています。主に夜間の子育てが難しい生活困窮世帯の子どもを対象に、生活指導や食事などのサービス提供にとどまらず、子どもたちがさまざまな世代の人たちと親密に関わる場として、子どもたちの対人関係における心理的・社会的な成長を支えているのがあめんどの特徴です。トワイライトに携わる大人たちは、大学生を中心とした若者、民生委員・児童委員、地域のボランティアなど多彩な顔触れです。恒松瞳美さんと恒松勇さんは、「地域のボランティアの協力は、子どもの発達を支えるとともに、地域の方たちに子どもたちの現状と社会課題について知っていただく効果もあります。私たちは住宅地のなかで居場所活動をしているので、その継続のためには地域住民からの理解が必要なのです」と話します。

あめんどでは「社会的包摂」「安心の土台づくり」を理念に据えながら活動を展開しています。あめんどとの関わりの深い大津市社協の井ノ口さんは、「あめんどには、これらの理

滋賀県大津市は、滋賀県の県庁所在地であり、南北にかけて市域のほとんどが雄大な琵琶湖を臨む歴史ある地域です。NPO法人あめんどは、大津市のなかでも住宅が密集する地域で活動しています。

あめんどでは、子育てや教育支援を軸に幅広く活動を展開しており、特に、2014(平成26)年から大津市のモデル事業として取り組んでいるトワイライトステイ(夜間の子どものための居場所づくり)事業では、地元の大学生を中心とした多くの若者がボランティアとして参加しています。本事例では、若者が活動に参加するうえでのポイント、大津市社協との関係性について紹介します。

念のとおり『誰でもここにいていいんだ』と感じられる雰囲気があります。通っている子どもたちのみならず、地域のボランティアにとっても大切な居場所になっています」と話します。

市社協を通じてつながった学生ボランティア

現在、あめんどで活動している若者のボランティアには、高校生、専門学生、大学生、社会人がいます。このうち多数を占めているのは、あめんど近くに立地する龍谷大学の学生サークル「トワイライトホーム」に所属している学生です。あめんどが龍谷大学の学生とつながったきっかけは、市社協が行う他の活動からでした。井ノ口さんは、「日頃から龍谷大学とは連携させていただいており、市社協の行う地域福祉活動でもお世話になっている先生に、ボランティアとしてゼミの学生にお手伝いいただけないかアプローチしました。市社協は、介

護保険事業を実施しておらず、地域福祉活動を中心に事業を展開していることもあり、地域の学生とのつながりをとくに大切にしています」と話します。当初は一つのゼミとのつながりで参加していた龍谷大学の学生ですが、現在は学生自身の力でサークル化し、さまざまな学部の学生たちがトワイライトに顔を見せます。なお、高校生や専門学生のボランティアはスタッフの知り合いや身内がほとんどであり、社会人の若者ボランティアのなかには、子どもの頃あめんどを利用した方もいるそうです。

学生ボランティアの一日と活動を支える工夫

学生ボランティアの活動は、トワイライトが始まる17時頃から開始します。学生によっては送迎も兼ねて利用している子どもと一緒にあめんどに来ることもあります。学生たちは、子どもたちと一緒に勉強や遊び、食事などを通して、家



子どもと遊ぶ大学生ボランティア

公益財団法人 パソニック教育財団「子どもたちの“こころを育む活動”2019」募集(応募締切9月27日17時)

家庭・地域・学校・企業などがそれぞれの立場で子どもたちのこころを育むために献身・努力している活動を表彰。全国大賞(1件) 賞状および賞金(50万円)、優秀賞(5件程度) 賞状および賞金(20万円)。

(詳細は「パソニック教育財団」で検索)



活動記録ノートには大学生ボランティアの気づきや成長が詰まっています

庭的な雰囲気のなか時間を過ごします。恒松勇さんは、「学生たちの得意なことや苦手なことを事前に把握し、彼らが自己表現できる時間にすることも意識しています。得意なことは、勉強を教えること、スポーツ、ゲーム、アニメ、ピアノなど多岐にわたります。苦手なこととして『会話』をあげる学生もいますが、利用する子どもたちにとってはかえってそのような学生の方がほどよい関係でいらっしゃることもあります。私たちは家庭のような居場所を理想としていますので、無理をせず自分らしく自然体でいることに意義があると考えています」と、あめんどの学生の特性に寄り添った工夫について話します。得意を活かすという視点では、トワイライト以外にも、レクリエーションや学習支援など、学生たちがボランティア活動のできる間口を広げる工夫もしています。

トワイライトの活動が終った21時過ぎからは、学生たちの振り返りの時間が始まります。振り返りの時間は、その日の活動内容や気づきを学生、スタッフで共有し、活動記録をノートに記入します。恒松睦美さんは「学生たちに活動を応援してくれてありがとう、と感謝するだけでなく、その日の活動から何らかの貴い学びを持ち帰ってもらうことに意義があると考えています」と話します。

市社協が寄り添う安心感

井ノ口さんをはじめとする市社協職員は、学生ボランティアが活動する様子を含めて、頻繁にあめんどの活動に訪れています。恒松勇さんは、「市社協は地域のなかでも信頼感があり、定期的に

社協に様子を見に来ていただけると安心感を覚えます」と話します。一方、井ノ口さんは、「地域で子どもの学習支援や居場所づくりを行うNPOや福祉施設、団体については、地域福祉をともに進める仲間として、あめんどを含めできるだけお邪魔させていただきたいと考えています。また、地域のつなぎ役である社協の立場としては、NPOや福祉施設、団体同士をつなぐ情報交換会やお互いの顔の見える関係づくりの交流会の開催にも力を入れています」と話します。情報交換会や交流会がきっかけで、地域の他の団体からあめんどに見学に來ることもあるそうです。

時代にあった若者との向き合い方を

今後の展望についてお話を聞きました。井ノ口さんは、「社協が活動を主催するというより、さまざまな団体とコラボして若者が地域に参加する仕組みを作っていくたいと考えています。学生たちが社会人になったとき、大津市で働きたいと思ってもらえるように地域を耕しています」と話します。

恒松勇さんは、「以前は学生のミーティングも盛んに行われていましたが、近ごろは学生サークル内の連絡がSNS上で交わされるようになり、サークル内の人間関係や意識に変化が生じてきたように思います。また、スタッフと学生と

の個人的なつながりも希薄になりつつあります。私たちは学生ボランティアを確保できなくとも活動が続けられるような運営形態をとっていますが、やはり学生が子どもたちにもたらす影響は大きいです。時代に合った若者との向き合い方を今後考えていきたいと考えます。また、即戦力となる学生ボランティアを獲得するために、中高生の頃からボランティアを育てる仕組みも考えていきたいです」と話します。

恒松睦美さんは、「支え、支えられる関係を超えた『us(私たち)の関係』を子どもたち、若者、地域のボランティア、社協、スタッフなどさまざまな人たちとこれからも築いていきたいと考えています。学生たちは利用する子どもにとってひとつのモデルとなります。子どもたちが、いつか彼ら学生ボランティアのようにボランティアとしてあめんどに戻ってきてくれるような循環を作りたいです」と思いを話しました。

トワイライトステイ事業(夜間養護等事業)

厚生労働省の「子育て短期支援事業」の一環として、ショートステイ事業(短期入所生活援助事業)とともに実施されている、母子家庭を対象とした夜間サービス。



一日の振り返りの様子

中央共同募金会「赤い羽根SDGsセミナー」(開催日:9月18日、会場:全国社会福祉協議会 会議室)

SDGs達成を視野に、「誰一人取り残さない」社会の実現のために、企業と赤い羽根福祉基金助成事業がパートナーシップを組む

意義などを考えるとともに、助成先団体の活動を通じて、今、取り組むべき課題を共有する。

(詳細は「中央共同募金会」で検索)

企業のチカラ

さらなるボランティア・市民活動発展へのカギ

CSRやCSVの推進が課題となるなか、企業によるボランティア活動に注目が集まっています。企業とボランティア・市民活動にはどのような接点があり、その意義はどこにあるのでしょうか。本コーナーでは、具体的な取り組みを紹介しつつ、企業によるボランティア活動の可能性と新たに生み出され得る社会的な価値について探っていきます。

第24回 広島県・株式会社マツダE&T 企業の社会貢献と社員のボランティア活動を無理なく進め、本業への循環をもたらす

会社概要

株式会社マツダE&T

本 社：広島市南区

創 業：1979(昭和54)年4月

社 員 数：1,363名(2019年3月現在)

資 本 金：4億8千万円(株主／マツダ(株)100%)

売 上 高：約161億円(2019年3月期)

株式会社マツダE&T(Mazda Engineering & Technology Co.,LTD.)は、マツダ株式会社を株主とする自動車の開発・デザイン等を中心とする企業。社員の9割をエンジニアが占める、自動車開発の技術者団体。

エンジニアリング事業で培った開発技術力により、福祉車両や自動車教習所教習車、冷凍車など、少量生産車の開発と製造を行っている。スロープ式で車いすのまま乗降可能な車両は、これまでに4万台以上を生産している。

私たちにできることは何かを考えた

マツダE&Tが社会貢献活動の検討を具体化したのは、今から8年ほど前です。マツダ車の開発と架装車の製造が本業のため、自動車の寄贈も含め、障害者の方に身近で直接的に役立ててもらえる活動を生み出せないか担当者間で議論を重ねました。

その結果、社員が使用しているパソコンを再利用できるのではないかと考えました。当時社会貢献活動の推進にかかり、現在は総務・CSRグループのマネージャーを務める中田隆英さんは、「当社は業務上の必要性から、高性能のパソコンを使用しており、数年で入れ替えをしています。このパソコンを、福祉車両を購入いただいている社会福祉施設において社会復帰を目指す方々に有効活用いただけないか?と考えました」と振り返ります。

パソコンは再生作業を行った後、毎年10数台を社会福祉施設に寄贈すること



パソコン寄贈準備のようす

株式会社マツダE&T 総務・人事部 総務・CSRグループ マネージャー 中田 隆英さん

になりました。実施後数年は、会社から直接これまでつながりのある社会福祉施設のみに寄贈していましたが、広島市社協ボランティア情報センター(以下、市社協VC)と相談させていただきながら、現在は市社協VCの仲介のもと、毎年福祉施設やボランティア団体も対象を広げて寄贈を続けています。

本業への思わぬ反映が生まれる

パソコンの寄贈を通じて、社会福祉施設との継続的なつながりが培われてきました。マツダE&T製のものだけでなく、さまざまな福祉車両を使用している社会福祉施設の職員の方々から、福祉車両への要望が「本音」で寄せられるようになりました。そのことを通して中田さんは、障害者の方の障害は一人ひとり異なるものであることに気づかされました。「人にやさしい新しい価値を創る」難しさを痛感したと振り返ります。

新入社員研修を通じて障害理解を深める

パソコンの寄贈とあわせて、社員の福祉教育・ボランティア活動推進についても長年にわたる取り組みが進められてきました。

マツダE&Tは、市社協VCが進める福祉教育事業の一環として、毎年新入社員教育のなかに障害の理解を進めるプログラムを設けています。プログラムでは当事者講師の講義や、高齢者の疑似体験や車いす体験を行います。中田さん



新入社員の福祉体験教育

は、「当該プログラムは、人事の新人教育の一環ではありますが、CSRという側面も持ち得ています。このプログラムを行うことで、自分たちの商品である福祉車両を使用する方々の状況を身を持って体験することができます。するとその体験が本業である“モノづくり”に活かされるだけでなく、それまでボランティア活動の機会が少ない若い世代の社員が、活動への参加を考えるきっかけとなっているのです」と話します。

市社協VCが紹介するボランティア活動は社内で広報され、毎年の平和記念式典での車いす介助をはじめ、市のフラーフェスティバル、地域の祭りの手伝いなどに社員が参加しています。その活動の様子は、「GANBARI NET」という社内インターネットに、ボランティア活動の様子や参加した社員の声が掲載されています。中田さんによると、「GANBARI NET」を立ち上げたことにより、ボランティア活動だけでなく、業務上の表彰や品質向上の取り組みなど、社内の多様な情報を掲載することができ、社員全員が見ることができます。この結果、それまで興味や関心のなかった社員に、活動の楽しさや充実感を伝えることができるようになってきたとのことです。

西日本豪雨災害では多くの社員が自発的にボランティアに参加

昨年7月に発災した西日本豪雨災害では、広島県内でも多くの被害が生じました。後に社内で実施したアンケートで社員の1割を超える150名以上が、土日などの休暇に被災地支援のボランティア活動に参加していたことが分かりました。

中田さんは、こんなに多くの社員がボランティア活動をしていたことに驚きましたと振り返ります。「これからは、一部の社員に限らず、会社全体に社会貢献やボランティア活動の気風を広げていきたいです」と、今後の取り組みについての強い思いを語っていました。



資料紹介

「月刊福祉7月号」(全社協 出版部)

特集は「令和時代の福祉を展望する」。平成から令和へという改元は、この間の福祉改革をいかに総括し、次の時代にどう引き継ぐかという重要な節目になっている。本特集を通して、時代の入り口に立った展望を試みる。
(詳細は「福祉の本出版目録」で検索)

ボラセンと 地域をつなぐ SNS

～はじめてのSNSコミュニケーション講座～

Vol.4 友達100人作ってみよう!

今までの内容を整理すると、

ボラセンと地域をつなぐためのコミュニケーションツールとしてSNSを活用できるようになるために、今まで3回ほど活用手順をご紹介させていただきました。このタイミングで一度振り返ってみたいと思います。

Vol.1 地域をつなぐSNS

(4月号掲載)

平時も災害時も地域をつなぐSNSとは?

Vol.2 SNSをはじめてみよう!

(5月号掲載)

Facebookアカウントの作り方

Vol.3 読者グループ(FB)に参加してみよう!

(6月号掲載)

初めての人でも安心して参加できるグループを作成

全国地域ボラセン交流会

<https://www.facebook.com/groups/volunteer.japan/>

地域のボランティア活動を盛り上げていくためには、SNSを活用した市民とのコミュニケーションが有効です。連載を通してICTのプロから情報発信・交換の基礎を学びます。日々の業務や活動のなかで実践してみましょう!



サイボウズ株式会社
マイクロソフト社にて開発業務を担当後、ITコンサルト会社を設立。2011年以降、全国各地の災害ボランティアセンターのIT支援を実施。2015年よりサイボウズ社に所属しつつ、被災地支援を継続中。

Facebook上の友達申請の仕方

スマートフォンの場合、その人のプロフィール画面に行くと上部に[友達になる]ボタンが表示されていますので、そのボタンをタップしてください。それで友達申請が完了します。



いきなり知らない人からの申請だと承認しにくいですので、申請とは別にひとと自己紹介的なメッセージを送っておくのが作法とされています。

グループ内に友達申請をしてみましょう。

先ほど紹介したが「全国地域ボラセン交流会」のグループに参加している人々は、この連載の読者の皆さんを中心となっていますので、同じような業界だったり、同じような方向を向いている皆さんだと思います。ぜひ友達申請をして、まずはグループ内のメンバーの皆さんと友達になり、交流をしてみましょう。

Facebook友達を増やしてみましょう!

SNSを通じた地域のコミュニティ活動の活性化のために、SNS上での市民とのコミュニケーションに慣れていたく必要があります。ただ、いきなりだと壁も高いですので、まずはこの連載を読んでいただいている皆さん同士でつながってみることをお勧めします。



地域で多文化共生活動に取り組むさまざまな登場人物の実践や思いをお伝えします。各地の実践から外国にルーツをもつ人とともにめざす住みよい地域づくりのヒントを見つけましょう。

一般社団法人
熊本市国際交流振興事業団
事務局次長
かつやともみ
勝谷 知美さん



災害時に芽生えた「共生」の姿を連携・協働の力で広げたい

熊本市国際交流振興事業団(以下、事業団)では、熊本市国際交流会館(以下、会館)の指定管理者として、会館を拠点に多文化共生の視点を十分に理解した人材を養成したり、地域の国際交流の場を設けたりと、地域に多文化共生のつながりが広まるようさまざまな活動を展開しています。社協との連携・協働にも前向きな事業団ですが、どのような多文化共生の姿を描いていくのでしょうか。

震災における外国人への支援

平時から多文化共生の地域づくりに力を入れている事業団ですが、平成28



年熊本地震の際には、会館に非常に多くの外国人が身を寄せました。事業団では外国人への聞き取り調査や各避難所の巡回、さらには行政職員や司法書士などさまざまな専門家による外国人のための生活相談会を実施し、今後の生活に不安を抱える地域の外国人を多面的に支えました。

災害時に見られた「共生」の姿

震災当時、地域の外国人は、通訳で支援者と困っている外国人をつないだり、子どもの遊び相手になったりと、頼りになるボランティアとしても活躍しました。また、ある外国人は普段は顔を合わせる程度の関係であった近所の人から「大丈夫だったかい?」と声をかけてもらい、孤独な不安が和らいだというエピソードもあるようです。勝谷さんは「災害時には、地域住民のなかで国籍を超えたつながりが芽生える瞬間もみ

られました。自然と支え合う姿は平常時においても理想である関係性であると考えます」と話します。

社協との連携・協働への思い

勝谷さんは、多文化共生の地域をつくるためには多様な団体との連携・協働が必要だと考えています。「とりわけ震災時にはボランティアの調整をしたり、生活に関する困りごとを相談されたりした際に社協との連携・協働の必要性を感じました。私たちの強みは地域の外国人とつながりを持ち、異文化理解や言語支援の専門家であることです。今後地域がグローバル化していくなか、国籍に限らずだれひとり取り残さない地域を、ぜひとも作り上げていきましょう!」と思ひを語ってくれました。



「地域で「最期」まで支える－琴平社協の覚悟－」(全社協 出版部)

住民主体を基本として、「誰もが安心して暮らせるまちづくり」を目標に先駆的に取り組んできた社協の、事業・活動の展開と実際に満ちた職員のあゆみ。

(詳細は「福祉の本出版目録」で検索)



ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

ボランティア活動・事故防止のポイント

全国各地で様々な行事が行われ、休暇等を利用してボランティアとして活動する人増えてきています。初めてボランティア活動に参加する人も多く、安全に活動するため事故防止を心掛けることが大切です。

1 熱中症に注意

暑い日のボランティア活動で、まず注意しなければならない事故は熱中症です。屋外・室内を問わず高温の環境で活動を続けていると徐々に体内の水分や塩分が失われ、その状態を放置すると、けいれんやめまいなどの熱中症の症状が表れ重篤な症状に悪化し、命にかかる恐れもあります。

●熱中症を予防するには

- 体内から失われた水分や塩分を補給することが重要です。定期的に休憩をとり、こまめに水分や塩分を補給しましょう。
- 屋外の活動中は必ず帽子を着用しましょう。



熱中症予防に有効な食べ物・飲み物

・塩飴・梅干・経口補水液・スポーツドリンク

2 蜂にも注意

春から秋までの季節の屋外のボランティア活動では蜂に刺される事故が発生します。特に、危険なスズメバチは8月から10月頃に繁殖期を迎え攻撃性が高くなります。スズメバチに刺されると「アナフィラキシーショック」と呼ばれる重い症状を発症するケースもあり、最悪の場合、死亡することもあります。

スズメバチに遭遇したら刺激せずに退避し、巣には近づかないようにしましょう。

●蜂に刺されたら

- すぐにその場からできるだけ(数十メートル)離れましょう。
- 刺された傷口を流水でよく洗い、針が残っている場合は取り除きますが、針に残っている毒に注意しましょう。
- 傷口の周囲をつまんで圧迫し、傷口から毒をしぼり出しましょう。
- 抗ヒスタミン成分を含むステロイド軟膏などを塗りましょう。
- 患部を濡れタオルなどで冷やし、安静にしましょう。
- 過去に蜂に刺されて具合が悪くなったことがある場合、また、めまいや動悸、息切れ、手足のしびれなど具合が悪いと感じた場合はただちに医療機関で受診しましょう。



■上記は保険の概要を説明したものです。詳しい内容につきましては、取扱代理店または損保ジャパン日本興亜までお問い合わせください。

＜取扱代理店＞株式会社福祉保険サービス
〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル
TEL 03-3581-4667 FAX 03-3581-4763 (受付時間: 平日9:30~17:30)

＜引受保険会社＞損害保険ジャパン日本興亜株式会社 医療・福祉開発部第二課
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL 03-3349-5137 FAX 03-6388-0154 (受付時間: 平日9:00~17:00)

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp>

INFORMATION

四半世紀のボランティア・市民活動の歩みを振り返り、「**ボランティア全国フォーラム2019**」開催!
新たな活動を展望します

(2019年12月14日(土)・15日(日)東京／全社協・灘尾ホール)

「広がれボランティアの輪」連絡会議（上野谷加代子会長：同志社大学大学院教授）は、今年で創設25周年を迎えました。この25年間、ボランティア・市民活動は、災害支援、少子高齢化やコミュニティの変化など、社会のさまざまな変化に対応しながら多様な活動を広げてきました。

そこで、ボランティア・市民活動を推進する皆さんなどを対象に、この四半世紀の我が国のボランティア・市民活動の歩みを振り返り、次の時代に向けた活動の展望を語り共有する場として、「ボランティア全国フォーラム2019」を開催します。

開催概要

日 程	2019年12月14日(土)～15日(日)
会 場	全社協・灘尾ホール（東京都千代田区）ほか
主 催	「広がれボランティアの輪」連絡会議 / 全国社会福祉協議会
参 加 費	5,000円（予定）※昼食等は別途
プロограм	第1日／12月14日(土) ◆記念講演 神野直彦さん（日本社会事業大学学長／東京大学名誉教授） ◆パネルディスカッション 4人の実践者（①協同（協働）、②企業の社会貢献や働く人々、③NPO・市民活動推進組織、④地域の実践者）により、今後のボランティア・市民活動を語ります。 第2日／12月15日(日) ◆分科会

分科会は9テーマを用意

分科会テーマ（概要）	
1	「人生100年時代のボランティア～SDGsと私～」
2	「協同（協働）のネットワークでつくるボランティア・市民活動」
3	「多文化共生を考える」
4	「子ども」※テーマの詳細な名称は調整中
5	「過疎と都市を支えるボランティア」
6	「どうしてですか？メンバーの固定化・高齢化～グループの継続を「人育て」の視点で考える～」
7	「SDGs～ボランティアが挑戦できることは～」
8	「若い世代のボランティア活動」
9	「居場所（サロン活動）づくりとボランティア活動」

※今後変更になる場合があります。

参加申込受付は9月下旬以降を予定しています。詳細は「広がれボランティアの輪」連絡会議ホームページをご覧ください。

<https://www.hirogare.net/>

今号の特集では、学生や若い世代のボランティア活動による、地域課題への支援やプログラムづくりの実際を紹介しました。地域の高齢化・過疎化の進展のなかで、学生や若い方々の力を地域のボランティア活動を結び、地域とのつながりを築いていく大切さを感じました。

災害被災地でも、多くの学生の活動が行われています。昨年の大阪北部地震では、災害ボランティアセンターの存在を知るため、大学生が被災地で自転車を使って細かなチラシ配りを行いました。また西日本豪雨では、大学が協力した災害ボランティアセンターの運営も試みられました。

学生や若い世代による日常的な地域とのつながりの力は、災害時の支援にも繋なるのではないかと感じました。（千葉）

事務局だより